

5H-06 情意面の評価の研究 その1

○田島 操^A

TAJIMA Misao

栗田一良^B

KURITA Kazuyoshi

大場文夫^C

OHBA Fumio

A 川崎市立久本小学校、B 聖セシリア女子短期大学、C 川崎市立宮崎小学校

情意面の評価、興味・関心、意欲、態度、指導要録

はじめに

新学習指導要領は、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応する能力を育成するとともに基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育を充実することをねらいとして現在実施されている。この改訂に伴い、指導要録も新学習指導要領にもとづく学習活動を適切に評価するように改善された。

本研究では、理科・生活科について最上位に位置づけられた「関心・意欲・態度」いわゆる情意面の評価について取り上げ、評価のあり方や具体的な方法について検討したものである。

1. 理科・生活科の評価の観点

理科では、それぞれ4つの観点で示されている。

- ①自然現象への関心・意欲・態度 ②科学的な思考 ③観察・実験の技能、表現 ④自然事象についての知識、理解

生活科では、

- ①生活への関心・意欲・態度 ②活動や体験についての思考、表現 ③身近な環境や自分についての気付きとなっている。

両者とも①については情意面に関する評価になっている。

2. 情意面における評価内容の定義

新指導要録では、興味・関心、意欲、態度といった情意面の評価が観点の第一になっている。今回の改訂の目玉の一つとなっている。しかし、これまでの研究の多くは、興味・関心、意欲、態度といった言葉や内容が整理されていない面もあり、情意面を細かく分析し、一人一人を評価した実践や研究は少ないようである。

ここでは情意面について興味・関心、意欲、態度の3項目に分け、それぞれの用語を定義し、授業の中で実行可能な評価方法を考えた。さらに、学習のどの過程でより多く表出するかも分けてみた。（右ページ参照）

興味・関心、意欲、態度は、児童の内面に働く要素が多く、児童の表出行動として直接観察することはむずかしい面もある。評価できる内容とそうでないもののいわゆる情意面の評価の限界も考察してみた。

おわりに

興味・関心、意欲、態度は心理学的にみても曖昧な部分が多く、また、これらの内容は相互に関連しあっていて、はつきり区別できない部分もあるようだ。ここで分類し、定義した用語や順序性といったことは、おおむね中心的なところを言葉にしたものである。

具体的に行う評価については、教師が単元毎に観察可能な行動の内容を細かく分析し、授業中や授業後においても評価するものである。

これらの研究を行うことにより多くの示唆を得ることができたが、今後さらに検討を加え、よりよいものを創造していくつもりである。

—理 科—

情意項目	定 義	順 序 性
興味・関心	○自然の事物・現象に対して好奇心を持つ。	○学習の発端になる。
意 欲	○問題を解決するまでやり抜こうとする心構え。	○知識や概念、探究活動を獲得する学習過程が中心になる。
態 度	○学習の繰り返しによって定着する科学的な行動の傾向性。 ○自然を大切にしようとする傾向性。	○学習の成果になる。

—生活科—

情意項目	定 義	順 序 性
興味・関心	○身の回りの環境に対して好奇心を持つ。	○学習の発端になる。
意 欲	○きめられた活動や遊びを最後までやり抜こうとする心構え。	○身の回りのことや自分について気付くなどの学習過程が中心になる。
態 度	○学習の繰り返しによって定着する規範的行動の傾向性。 ○身の回りの環境を大切にしようとする傾向性。	○学習の成果になる。